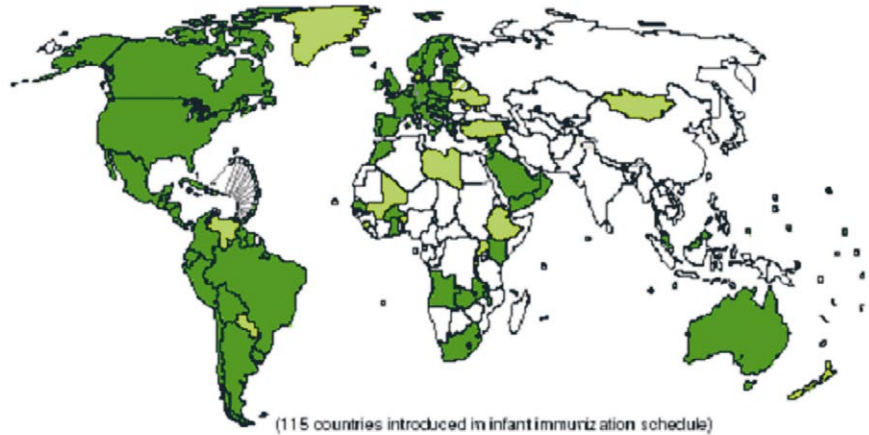


新しい予防接種 ヒブワクチンの話

さとう小児科

佐藤 邦彦 院長

Countries having introduced Hib vaccine and infant Hib coverage, 2007



上の地図は、一昨年Hib(ヒブ)ワクチン接種が行われていた115カ国が緑色で示されています(WHO資料)。日本では昨年の年末に接種できるようになりました。

- Hib ≥ 80% (94 countries or 49%)
- Hib < 80% (19 countries or 10%)
- Hib vaccine introduced but no coverage data reported (2 countries or 1%)
- Hib vaccine not introduced (78 countries or 40%)



Hibとは?なぜ問題か?
Hib(ヒブ)とは「ヘモフィルス インフルエンザb」という細菌の略称で、冬に流行するインフルエンザとは別の物です。この菌はのどや鼻に住み着いており、ちょっとしたきっかけで全身に広がって、化膿性髄膜炎、喉頭蓋炎、骨髄炎、肺炎、中耳炎などを引き起こします。また、抵抗力の弱い乳幼児にかかりやすい性質をもっています。単なる「かぜ」などに無意味な抗生物質を使用すること

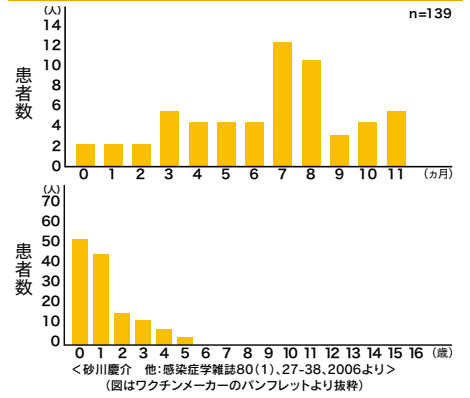
2007年現在、世界193カ国中115カ国で使用(WHOの資料)されており、残り78カ国に

ヒブワクチンの使用状況

このうち問題になるのがヒブ感染症の中で最も多い化膿性髄膜炎です。この病気は、脳と頭の骨との間にある「髄膜」「髄液」という膜や液体の中に細菌(ここではヒブ)が入り込んで起こるもので、おう吐、高熱、けいれん、意識障害などを起こします。髄膜や髄液には抗生物質が入り込みにくいいため、大量の抗生物質を点滴から入れて治療しますが、すつきりとは治りにくい病気です。5歳未満の子供で年間約600人)があり、そのうち5%以上の子供が死亡し、25%の子供が重い後遺症を残しています。この病気はほとんどが5歳未満でかかり、生後6ヶ月から1歳代にピークがあります。これらのことから、ヒブワクチンによる予防が必要となります。

の多い日本では抗生物質の効きにくい菌が増え、治療に難渋することがしばしばです。このうち問題になるのがヒブ感染症の中で最も多い化膿性髄膜炎です。この病気は、脳と頭の骨との間にある「髄膜」「髄液」という膜や液体の中に細菌(ここではヒブ)が入り込んで起こるもので、おう吐、高熱、けいれん、意識障害などを起こします。髄膜や髄液には抗生物質が入り込みにくいいため、大量の抗生物質を点滴から入れて治療しますが、すつきりとは治りにくい病気です。5歳未満の子供で年間約600人)があり、そのうち5%以上の子供が死亡し、25%の子供が重い後遺症を残しています。この病気はほとんどが5歳未満でかかり、生後6ヶ月から1歳代にピークがあります。これらのことから、ヒブワクチンによる予防が必要となります。

インフルエンザ菌による化膿性髄膜炎の発症年齢



おわりに
このワクチンは自費になります(7000円前後が多いとのこと)。詳細はワクチンを良く知っている小児科専門医にご相談下さい。なお、供給量が少ないため希望時期に接種できないことをご了承ください。

髄膜炎患者数(5歳未満の子供10万人当たり)		
国名	ワクチン導入前	ワクチン導入後
アメリカ	54人	1人未満
イギリス	24人	0.6人
ドイツ	23人	0.9人
オーストラリア	25人	6人
日本	8~9人	これから

接種時期と副反応は?
生後2ヶ月から7ヶ月未満の児は4~8週間隔で3回、および1年後の計4回接種。7ヶ月から1歳未満の児は4~8週間隔で2回、および1年後の計3回接種。1歳から5歳の児は1回接種。三種混合ワクチンや麻しん風しん混合ワクチンと同時に接種できます。副反応は三種混合ワクチンとほぼ同じと考えられます。

日本が入っています。欧米ではヒブによる化膿性髄膜炎がなぜか日本の数倍もありました。ワクチンにより激減しています。